ソニー教育財団×ぐうたら村　保育実践ゼミ
「やってみよう！科学する心×いのち真ん中社会の保育実践」
～　わたしの保育実践――最終報告レポート　～
『いまの生活からはじまる豊かな保育環境』

ひたちなか市立東石川幼稚園（茨城県）
平野　由起子（ゆっこ）

○　はじめに・・・

昨年度から、ソニー教育財団の公認サークル「エネモリ」を仲間と共に立ち上げ、茨城県を中心とした保育者仲間たちと毎月集っている。「科学する心」をテーマにした事例を持ち寄り、保育を語り合うことを楽しんでいる。そして、個人的にぐうたら村の存在は数年前から知っており、いつか、縁があったら訪れてみたいという興味も抱いていた。

そのような中、日頃の自分の保育実践を見直しながら、未来に向けて育っていく子どもたちの「いま」を、どれだけ豊かな学びを紡いでいく園生活を保障しているだろうかと自問していた。今回のゼミのテーマでもある「持続可能な社会とこれからの保育・幼児教育」に関心をもち、参加者同士が支え合うフィールドワークと、自園に戻っての「往還型」の取り組みを実践していく内容に心が動き、自分も変わりたい一心で、未来の一歩を切り拓く勇気をもって参加することにした。

○　８月ゼミ（第１回目）に参加して・・・

山梨県北杜市、八ヶ岳を背に凛と佇むぐうたら村で、全国から集う仲間と出会った。ゴリさんを囲んで、「もしも宇宙から来た幼い人に『地球ってどんな星？』と聞かれたら、あなたはこの地球をどのように説明しますか？」と問いを立て、仲間とその時に浮かんだワードをシェアしながら固定概念的な思考を解き、広げていく。それから森に入っていったが、そこでは普段の生活では見落としてしまう生き物たちの息吹、静けさの中にもあちらこちらでの力強い生命の営みに感覚を研ぎ澄ませていく。森が自分を包み込んでくれるような感覚にもなった。１０mほどの木々が太陽からの熱を遮り天然クーラーの役目を果たしてくれること、微生物が落ち葉を分解して土に還っていく過程、森の生態系を循環することが環境を豊かにしていることなどを森の中で感じることができた。

仲間と共に木の実でジャムを作ったり釜戸でご飯を炊いたりと、食することへの豊かさを感じた。周りに何気なく置いてある植木鉢と化したやかんや篩なども、二次利用しているものばかりであり、人がこれからの生活を豊かに循環させていくための工夫はどこにでも存在することと肌で感じた。

持続可能な社会を実現するために、自分たちが未来世代にできることは何か、幼児期に大切にしたい経験は何か、今すぐからでも自園で子どもたちと共に始められることを問いながら、１回目のぐうたら村ゼミを後にした。

○　自分の園に戻ってから、取り組んでみたこと・・・

・職員全体に、ぐうたら村での学びをドキュメンテーションで共有し、理解を図る。

・特別に何かを購入するのではなく、今の園庭環境を工夫して、循環する環境を生み出すための私の想い。

☆　コンポストを作りたい

☆　親子で堆肥作りに関心をもってほしい

☆　自分たちで作った土で自分が選んだ植物を育てる経験を重ねたい。

（便利ではあるが、ホームセンターで購入していた土を園の中で作ることは可能ではないか。これからの人は、使い捨ての消費社会から、目の前の環境で知恵を絞り、生活に潤いを感じながら、循環社会への生き方を選んでいく人に育っていってほしい。）

→出勤時に幼稚園裏の材木店で「ご自由にどうぞ」の木っ端コーナーを発見。早速社長に声を掛け、木っ端をいただいて園に持ち込んでみよう。

≪園庭に落ち葉レストラン（コンポスト）を作ろう！≫（４歳児１７名）

・古い切り株周り。日当たり良好。

（桜の切り株周りがくぼんでおり、よく職員もここでつまずいて足を痛めていたので、コンポストを作るのに木っ端で囲むと、ケガ防止にもつながった！すでに一石二鳥！）

・園庭端っこ桜の木の近く。半日陰。

（園庭の一番端っこ。今まで子どもたちが足を止める場ではなく、何も関心は生まれないコーナーだった。ここに循環する生態系を創り出すことで、子どもたちがワクワクする絶好の遊び場につながるのではないかと考えた。）

☆さっそく夏に栽培したヒマワリを育てた土を再生してみよう。

ヒマワリを植えた土をもう一回戻そう。
栄養入れたらまた元気になるかな・・・

栄養たっぷりの土になぁれ～♪

☆栄養ある土に生まれ変わるには、パルパリの落ち葉と野菜くず、米ぬかと水が必要であり、教師が毎日何気なく堆肥を作っていると、子どもたちのやりたい思いが膨らみ、毎日継続して土づくりを楽しんだ。教師もコンポストという言葉を使わず、子どもたちにこの場所の名前はどのように考えるかを尋ねたら「いろんな生き物が来て、おいしい土を作りたいから『落ち葉レストラン』にしよう！」とネーミングは集う子どもたち全員が一致し、子どもたち自ら看板を作った。

米ぬかってお米の洋服なんだよね。気持ちいいなぁ。ずっと触っていたいなぁ・・・。

パリパリ落ち葉も入れますよ～。
（近くに落ちている桜の葉を集めてきて）
パリパリパリ～。

ぼくもやりたい！

リサイクルっていうんだよ。地球に優しくて、僕たちエコしてる！

みつけた。ようこそ～。

いたいた！この白いのってなに？生き物？

４歳児クラスの子どもたちと作り始めた落ち葉レストランが、なんだかとても楽しい空間に見えたようで、異年齢児も自然と集まってきた。フカフカで栄養たっぷりの土になることを願いながら、次第にこの空間がワクワクする場へと変化していった。

土づくりを始めると、幼虫、ダンゴムシ、ムカデ、そして、白い菌等も見つけていた。子どもたちは動く生き物は発見しやすいが、菌糸等には今までは関心を寄せていなかった。しかし、自分たちで作った落ち葉レストランの周辺をよく観察するようになると、「これも生き物？」と夢中になり、虫メガネを使って知ろうとしたり感触を楽しんだりと、探究する姿や自分たちが築く場への愛着を感じる様子が見られた。

☆園庭で集められる財産（落ち葉）、家庭から持ち寄った米ぬかや野菜くず、水分を加え、土を肥やし、フカフカな感触になっていい匂いがすることを子どもたちは面白がり、子どもたちがやりたいと感じる気持ちが膨らむ姿を支えていった。

☆ビニール袋の布団をかけて寝かせている状態の場を触れてみると、ふんわりと温かさを感じる。４歳児が「触ってみて」と３歳児を誘い、集まってきた３歳児が土の温かさや触れていたい思いをつぶやいた。

子どもたちは、土の柔らかさや温かさ、米ぬかの匂いや滑らかさ、野菜によって異なる触感など、五感を通して土がフカフカになる過程を、日々自ら喜んで作業を繰り返し楽しみながら、友達と共有している様子が見られた。

おちばレストランの土ってあったかいね～。

ねぇ～！
ずっとさわっていたいねぇ。

☆保護者の協力のもと、園庭の落ち葉をコンポストへ。

昨年度まではゴミに出していた落ち葉を堆肥にして、園内の環境資源に役立てたい意向を保護者に手紙で発信すると、とても協力的で、自分たちの活動が園の堆肥に繋がることを楽しみにしてくれた。

その後、自宅から米ぬかや野菜くずを持ち寄ってくる子が増え、パリパリな落ち葉を散歩中に見つけては粉々にして加えるなど、園と家庭とで子どもの興味や関心を共有し、じわっと活動が持続していく大切さが見られた。

○　１１月ゼミ（第２回目）に参加して・・・

８月の夏の季節とは違う顔を見せた１１月のぐうたら村。実りの秋とは、種の実りでもあることに気付かされた。次の世代に子孫を残すために、命あるかぎり、それぞれの方法で種を残す。人が想像力を働かせ、鳥が羽を休ませられる場をあえて残したり、あえてバイオネストに隙間を作って種や虫が宿ることができる場を設けたりしてみる。また、苗木を育てるために丸ごとコンポストを植木鉢にしてみたり、畑は耕すのではなく積み重ねてみたりもした。自然物は朽ちていき、自然に還る循環した営みをじっくりと体験することができた。目の前にある資源を生かして、人が手を加えることで循環のスピードを加速させることも可能であり、人類も自然の一部であることがより一層実感できた。自園に戻り、自分の学びが子どもたちとの実践にどのように繋がるのか楽しみになった。

○　２回のぐうたら村ゼミに参加して、自園での可能性を広げてみる・・・

☆友達とイメージを合わせて・・・『むしたちのようちえん』や『１００かいだてのいえ』

材木店からもらった木っ端を用いて、虫たちがたくさん集まる場を期待しながら、友達と一緒に作りはじめた。自分たちが楽しんでいるように、虫たちにも楽しくこの場所で遊んでほしいと願い、子どもたちはこの場を「むしたちのようちえん」と名付け、フェンス沿いに今まで園庭で出合った虫の絵や看板を描いたり、釘やトンカチを使ってバグハウスを作ったりした。また、木っ端を平面的に広げたり立体的に重ねたりして、自分のイメージを絵本『１００かいだてのいえ』のように見立て、様々な虫たちの暮らし方を想像しながら家作りに夢中になっていた。

☆ご近所の材木店への探検散歩

ある日、子どもたちから、木端をくれた材木店にお礼を伝えたいと提案があった。実際に足を運ぶと、たくさんの材木が店に並ぶ迫力に驚き、匂いを嗅いだり触れてみたり、また店番をしていた方に木端のお礼を伝えたりして、自分たちの地域の店に親しみをもつ様子が見られた。「木のことで知りたいときにはこの材木店にこようね」と、帰り道を歩きながらつぶやいていた。

☆米ぬかクッキーを食べてみよう！

米ぬかを落ち葉レストランに混ぜ込みながら、一人の子がふと「米ぬかってご飯の服でしょ？どんな味がするのかな…。食べてみたいね…。」と、小さな声でつぶやいた。教師は「本当にね。どんな味がするんだろうね。食べてみたいねえ！」と返すと、その日のミーティングで、米ぬかについて調べてみようとの議題になり、翌日には米ぬかの利用法として石鹸やお母さんの化粧水、ふりかけなどの食べ方、パンにも入れるなど料理のレシピなどを親子で調べてくる姿があった。その中でも、幼稚園で友達と一緒にできることを話し合い、米ぬかクッキーを作る案にまとまった。作る過程でも、米ぬかの香りを嗅いだり、手触りを味わったりしながら米ぬかの性質を、五感を通して感じていく。焼き上がるとクラス全体が香ばしい匂いに包まれ、子どもたちは大喜びであった。自分たちで作った米ぬかクッキーを、じっくりと、大切に、愛おしそうに味わっていた。

いいにお～い！

おいしい！米ぬかの匂いがする！
おかわりほしい！

○　おわりに・・・

今回の往還型の実践ゼミに参加し、コンポストを作りたいと始めた実践が、園庭環境での遊びを豊かにし、地域の人や食へとつながり、様々な方向へと学びがつながっていくことができた。また、未来世代の生活の在り方に問いをもち、子どもたちと共に実践を進めて学ぶために臨んだはずが、最終的に自分の生き方への価値観の上書きでもあった。自分の行動に、どれだけの「つもり」が存在していたか。エコを意識した取り組み、生産者を想像した消費、地球になるべく負担をかけない暮らし方など、自分なりに考え、選択して生活してきたつもりであった。しかし、今の子どもたちが大人になる頃、またその次世代が、限りある地球資源と向き合い、よりよく暮らしていくには、今、目の前にある環境から何を生み出すか、限られた環境からどのような工夫を凝らすかと考え、自分ごととして実践に移していくことが大切だと感じた。

人は想像・創造する生き物だと思う。子どもたちの想いを信じ、共に考え、見守りながら実践を支えていくことを大人の使命だと捉えると、一人一人の子どもの声を丁寧に聴き取り、周囲へ切り返していくことで集団での学びの機会にも繋がる。子どもたちの声が具体的な活動に反映し、その都度子どもも大人も話し合いながら探究していく園生活に、価値を見出したい。これからも目の前の環境に子どもたちと共に問いをもち、よりよい暮らしにつながるように、循環する生活を楽しめる実践者であり続けたい。